

大学で大切なもの

安井 泉

人文社会科学研究所教授 外国語センター長

大切なものは

最近のマンションの中には、オール電化をうたい文句にしたものがある。最先端の技術を駆使し、ガスの裸火がないので火事を出す心配もない。我が家でも電磁調理器なるものを購入し、なべを楽しむことにした。レバーで火力も自由に調節でき、便利であるはずなのだが、どうも雰囲気落ち着かない。ジーという音がするし、食べていて温まらないのだ。そこで、思い切ってホースノンの卓上コンロに変えてみた。炎が見えるだけで妙に落ち着く。なによりもガスが目の前で燃えているので、食べる前から温まる感じがする。なべには、炎が不可欠だったのだ。最新を追いつめすぎて、気がつかないうちに大事なものを置き忘れてしまっていた。大学は今、改革の嵐の中にある。大学にとって本当に大切なもの、変えてしまってもいけないものを、この時期に考えておきたい。

教育はどうするか

大学という教育機関が、他の教育機関と大きく異なる点は、大学が研究施設でもあるという点である。たとえば、高等学校であれば、教える内容の総体はすべて決まっている。教育はその総体をカリキュラムに沿って少しずつ切り崩しながら生徒に提示してゆく。提示の仕方への工夫や速度、順番などの研究は、教育現場では盛んに行われている。しかし、知識の総体に未知のものを加えるということはない。大学以外の教育機関が、知識の総体の消費であるとすれば、大学という教育機関は、知識や知見の増殖の使命も担っている。それが大学の研究機関としての使命である。

知識や知見の増殖は、並大抵のことではかなえることはできない。なにしろ、何千年という年月をかけて、研究は進められるだけ進められてきたからだ。それでも、今までとは異なった切り口や接近方法をとる

ことによって、未知の領域に迫ったとき、突然「わかった」ということが起こりうる。「わかった」ことの裏づけを、これでもかと思われるほどに取りながら、本質に迫る正しい知見であることを確かめる。

大学において研究と教育が直結してくるということはあるとしても、正しいと確かめられたその時点で直ちに授業に持ち込むことはできない。新しい知見は新しい皮衣に入れ、少し熟成をはからなくてはならない。あるいは、そのあたりにしばらく置いて、腐葉土になるのをまたねばならない。授業の中に理想の形で新しい知見を導入するのに、「あせり」は禁物なのである。

大学での教育は、常に、真摯な研究の産物として存在している。それは、外国語センターにおける共通外国語においても同じである。教養科目としての外国語教育は、専門の科目とは異なり、出来立てよりもしばらくたって落ち着いた「味」が必要な、難しい科目でもある。

ことばについて

ことばを伝達的手段と捉える考え方があ
る。たしかに、コミュニケーションを行う
ときにその手段としてことばが用いられる
ことはある。しかし、ことばをコミュニケー
ションの手段としてしか見なくなってく
ると、ことばはやせ細ってくる。伝えたい中

身をことばに置き換えるとき、その中身の
かなりの部分がそぎ落とされて、ことばに
置き換えられる。ことばを受け取った人が、
そのそぎ落とされたもののみを理解した
だけでよしとすれば、一応のコミュニケー
ションが行われたことになる。そぎ落とさ
れた部分の復元はあまり問題にされない。
ことばの大切さは、ことばの奥に潜んでい
る、ともすれば、そぎ落とされかねない部
分にある。それは、文化ということばで呼
ばれたり、心のひだと呼ばれたりする部分
である。現代の社会においては、「マジ」、「ウ
ソー」など、なににでもあてはまる底の浅
いことばばかりが用いられ、ものごとを深
く考えない傾向がある。豊かな意味をもつ
ことば、深い意味をもつことばを慎重に選
ぶことをしなくなっている。作家などが粘
り強く慎重に選び取っていることばを理解
できなくなる日が遠からず来ってしまう気が
する。テレビや新聞に見る日常のことばが、
ことごとく伝達的手段としてしか用いられ
なくなってしまうている。

われわれの社会における、この目に見え
ない破壊は、静かにしかも確実に進み、人
の精神を蝕んでいる。教養教育としてのこ
とばの教育は、このような現状を、正しい
方向に向ける使命を課せられていると考え
るべきである。

大学の改革と教養教育

現在の大学改革は、人員の削減を旗印に、人事の凍結など目に余る様相を呈している。そもそも大学という場において、もっとも大切なものは人である。志願者を増やすための小手先の細工はむしろ後退しか意味しない。質のよい教員を集め、質のよい教育をし、質のよい人材が育っていけば、人が集まってくる。そのために必要なのは、国家50年プロジェクトのようなものであり、中期5カ年計画というような近視眼的な施策ではない。「ことばの奥深さ」を精読を通じて教えようと思っても、ことばをなめるように読む訓練を受けてこなかった教員も目につき始めている。基本的な技術の継承が、効率や生産性の名のもとにないがしろにされてきた「つけ」を前に愕然とするときは間近に迫っている。変えるべきところと変えてはいけないところとの区別を、「長」の立場にいる人は、ひとりじっと考えねばならない。

外国語センターの教育

ここ一年以上にわたって、外国語センター内部で、英語教育のあるべき方向を考えてきている。世間や学生におもねらない教養教育としてのことばの教育の方向は、「ことばの奥深さ、ことばのおもしろさ」を教えることなのである。初修外国語となる

第2外国語においてもこれは同じである。初修であるがゆえ、1年間でどの程度のことを習得すべきであるか、その指針を示す試みも、ドイツ語と中国語では行われている。ドイツ語検定試験の準備をかねて覚えるべき重要単語の一覧表が「ドイツ語検定準備用単語集」として、中国語では学習の指針が「最低所要学習項目リスト」として、それぞれの外国語受講者全員に配布され、功を奏している。

「文学部を残している大学は信頼できる」とまで言われるほど、大学の姿はゆがめられてきてしまっている。そろばん以上に大事なことがあることを忘れないようにしなくてはならない。そろばんばかりを前面に、経済効率ばかりを追い求めると、大学の学問の資質がどんどん疲弊し崩れていってしまう。もはや、個々の大学の責任というよりも、法人化によってしかるべき責任を果たさなくなってしまった国の責任が、早くも問われるべき現状となってしまっている。

筑波大学の中期計画

筑波大学全体の各センターの中期目標として「学内共同利用の教育研究施設を設置し、教育に必要な設備を整備」が挙げられている。共通科目の外国語は、学内共同利用施設を設置して行われているという点に関しては、中期目標は達成されているが、

「教育に必要な設備の整備」という点においては、その着手すらされるにいたっていない。特にLL教室やテラライブラリーにおいては、かつては当該組織が概算要求と言い出さなくても、7年から10年の周期で機器の更新が自動的に行われていた。しかし、現状は、18年も昔の機械を用いて授業を行っている。あと1、2年で中古部品さえ底をつき、修理不能となる昔の機械をこれだけ大切に使い続けている大学の現場は少ないのである。最新の機械さえそろえればよいというわけではないが、これは常軌を逸している。はなはだしく遅れを取っていると認識しないわけには行かない。

外国語センターでは、毎概算要求に入れて要求をし続けているが、LL教室の機械の更新は実現されないでいる。このような設備の老朽化は、大学のいたるところでこれから起こってくることであろう。中期目標にある「教育に必要な設備の整備」を達成できずに終わることのないように、大学全体として配慮すべきである。

大学人として忘れてはならないこと

教育は商品ではない。市場調査の名のもとに学生のニーズにとらわれすぎて、教育の商品化をしてはならない。経済効率を根拠とするあらゆる提言に抵抗するだけの見識と気概が、現在ほど大学人に問われてい

る時期はない。深い洞察と認識を肝に銘じなくてはならない。長期的研究や基礎研究・基盤研究など経済と結びつかない研究こそが大学の使命である。これは、短期的で経済と直接結びつく研究が至上の使命である企業の研究所ではできないことである。大学の研究と企業の研究とが相補的に対照を成してこそ、国は健全な姿として立ちゆくのである。

教育の本質がなにであるのか、大学人であればすぐにでも答えることができるであろう。このことに宗旨替えを強要するような教育の理念は大学の理念からは排除されなくてはならない。成果を統計的に計測するための労力は地道な日常をおろそかにするものである。熱気をもつ研究教育を壊すものでしかない。研究教育の熱気を取り戻すために、大事なものを大学は必死で守らなくてはならない。

(やすい いずみ/英語学・言語文化)